

二〇二〇年八月二二日

馬鈴薯の花を過ぎればオホーツク
流星や我がベランダの小さき空
畦道の見えなくなりし稲田かな
片付けに暮るる一と日やつくつくし
稲穂手にしやがむ翁の夕日影
岩疾る女滝の腰を揺らす風

二〇二〇年八月二〇日

藍の花一茎飾る長屋門
ソリストの魔法のごとき指涼し
買い物へ二の足を踏む炎天下

二〇二〇年八月一九日

シャワー浴ぶネット会議に先立ちて
職引きし気楽さ夫の大昼寝
野仏を囲みて風の千草かな

二〇二〇年八月一八日

路地裏の庇間渡る天の川
工事場のウンボ唸れる炎天下
ちぎれ雲ひとつ一つに小さき秋
声のみでめもじかなわぬ蟄蛙
六地蔵夾竹桃を天蓋に

凡士

なつき

明日香

満天

素秀

たか子

素秀

やよい

三刀

せいじ

菜々

智恵子

素秀

凡士

たか子

はく子

やよい

二〇二〇年八月一七日

遠山の稜線しるき稲光
山椒の実高野の旅の家苞に
乱切りの男料理や秋の茄子
手作りの表札涼し新所帯

二〇二〇年八月一六日

体温を超える暑さに怯えけり
葉刈りして仏間へ通ふ盆の風
駅降りてマスクを外す稲穂道

二〇二〇年八月一五日

遺骨なく写し絵のみや敗戦忌
送り火の煙自ずと西方へ

素秀

やよい

かかし

菜々

たか子

うつぎ

こすもす

もとこ

ぽんこ

毎日句会みのる選・二〇二〇年八月二三日